

豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けた生徒の育成

— 「理解する力」「表現する力」「伝え合う力」を育成する活動を通して—

東 佑 樹 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

山内 誠 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

牧 俊 輔 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

永峯枝理子 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

Developing students who possess qualities conducive to communicating meaningfully: Activities that develop understanding, expression, and communication skills

HIGASHI Yuki, YAMAUCHI Makoto, MAKI Shunsuke and NAGAMINE Eriko

キーワード：コミュニケーション、プレゼンテーション、発問の工夫、要約指導、外部リソース

1. 研究仮説

社会や世界、他者との関わりに注目したコミュニケーションを図りながら、資料やデータを活用した英語での言語活動を実践すれば、新たな時代を豊かに生きる生徒を育成することができる。

2. 研究主題並びに仮説設定について

2.1. 時代の要請から

中学校学習指導要領外国語編（2017年7月）において、外国語科の目標は「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと [やり取り]」、「話すこと [発表]」、「書くこと」の五つの領域で設定されている。その背景には、「やり取り」、「即興性」を意識した言語活動が十分になされていないこと、読んだことについて意見を述べ合う等の複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことが課題として挙げられる。このことから、外国語の指導において、他者との関わりを意識した統合的な言語活動に取り組ませる必要があると考える。

また、人工知能（AI）を含む技術革新が進む中、これからの時代を生きる子供たちは、人間の強みを発揮し、これらの技術を使いこなす力が求められる。学校教育には、そうした力を身に付けさせることも求められていると考える。

2.2. 生徒の実態から

本校では、平成23年度から平成29年度まで『創造的な学び』について研究・実践してきた。英語科では、「創造的に考える力」と「創造的に考える態度」の二つを兼ね合わせた「円滑なコミュニケーション能力」を育成するために、「手がかりを見いだす活動」、「考えを広げる活動」、

「よりよいものへまとめる活動」という三つの活動を統合的に取り入れ、単元構成や授業設計、各言語活動の工夫を行った。また、自ら課題を設定し、その解決に向けて実践を繰り返させることで能動性を発揮させたり、コンセンサスサークルを用いた言語活動を通して、新たなアイデアを取り入れて課題の解決を図らせることで独自性を発揮させたりする手だてを行った。さらに、「円滑なコミュニケーション能力」を高めるために、複数の生徒にそれぞれ役割と責任感を持たせた上で、よりよい考えや意見を生み出す「協働的な言語活動」として、ジグソー学習を取り入れた。これらの研究実践により、多くの成果を得る一方で、次のような課題が見られた。

【課題】

- ・ 「ロジカルカード¹」やキーワードを用いた「話すこと」の指導において、教師と生徒とのインタラクションの中では、生徒が誤った表現を用いる場面があった。また、間違いを恐れて「話すこと」に消極的になる生徒、話し手の考えをうまく汲み取れない生徒等が見られた。
- ・ 「LAF²」学習やICEモデルを用いたルーブリックシートを活用することで、生徒は能動性を発揮して large task であるスピーチやプレゼンテーションに取り組んだが、受け手に共感をもたせるための工夫が更に必要であった。
- ・ ジグソー学習を通して、協働を意識しすぎるあまり、批判的な意見に対して自分の考えや気持ちを表現することに不安や苦手意識をもつ生徒の姿があった。

これまで述べてきたことを踏まえ、本校英語科では、AIの普及や更なる技術革新を見据え、生徒たちが人間としての強みを発揮しながら、これまでに習得してきた知識や技能・経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちを適切に表現することができる力を身に付けさせたいと考えた。また、その過程において、自分の考えや気持ちを、自信をもって伝えようとする態度を育みたいと考えた。そのためには、英語による協働的な言語活動を重視しながらも、伝えたいことが受け手に届くように資料やデータを用いることで内容を補強させたり、外部人材を活用して学習した語彙や表現等を実際に使用する場を設定したりする等の指導の工夫が必要である。これは、本校の研究主題として掲げている「新たな時代を豊かに生きる生徒」の育成にもつながると考える。

以上のことから、本校英語科では、研究主題を「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けた生徒の育成」と設定し、「社会や世界、他者との関わりに注目したコミュニケーションを図りながら、資料やデータを活用した英語での言語活動を実践すれば、新たな時代を豊かに生きる生徒を育成することができる」との仮説を立てた。

¹ 円滑なコミュニケーション能力の向上を目的とした言語活動を行う際に用いる、本校英語科が作成したカード。カードには if や because のような接続詞、generally や hopefully のような副詞、in short や on the other hand のような表現等が書かれている。このようなカードを用いて表現活動を行わせることで、カードに書かれた表現をきっかけに、生徒が自信の意見や考えを様々な角度から述べたり、かつ論理的に考えをまとめながら述べたりすることができるようにする手立として、授業で使用するようにしている。

² 能動的に自己課題設定を行わせるための工夫として、本校英語科が独自に考えた学習形態「Learners Autonomy Flow」の略。対象者に向けた発表を通して生じた問題を把握する「インプット」の段階、生じた問題について「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を基に、それらの問題の解決に向けた課題を発見する「プロセス」の段階、発見した問題の解決を図るための練習である「アウトプット」の段階という、三つの段階を絶えず繰り返させることで、よりよい自己課題設定が可能となり、英語学習に対して能動的な態度を身に付けさせる。

3. 研究の構想

3.1. 「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力」を育成するために

3.1.1 「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力」とは

中学校学習指導要領外国語編において、外国語の音声や文字を使ってコミュニケーションを図る資質・能力として三つの要素に整理している。それは、受け手としての「理解する力」、伝え手としての「表現する力」、そして双方に関わる「伝え合う力」である。それぞれの力の捉えは表1のとおりである（表1）。

本校英語科では、これらの三つの力の育成を図るとともに、英語学習における知識や技能・経験に加え、必要に応じて資料やデータ等を用いながら、関心のある事柄や日常的な話題、社会的な話題について、世界の人々と互いの考えや気持ち等を伝え合うことで、これまで以上に豊かなコミュニケーションを図ることができると考えた。このような力の総称を、本校英語科では「豊かなコミュニケーションを図るために必要な力」とした。

また、外国語で表現し伝え合うためには、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉えることや、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けていることも重要であると考えた。そのために、多様な人々との対話といった実際のコミュニケーションの場面において自らの知識や技能・経験を活用し、考えを形成・進化させ、話したり書いたりして表現することを繰り返すことで、生徒に自信をもたせることが必要であると考えた。このような態度を、本校英語科では「豊かなコミュニケーションを図ろうとする態度」とした。

このことから、「豊かなコミュニケーションを図る資質・能力」を構成する要素を次のように整理することができる。

- ・ 豊かなコミュニケーションを図るために必要な力
- ・ 豊かなコミュニケーションを図ろうとする態度

表1 外国語でコミュニケーションを図るための資質・能力として整理される三つの力

「理解する力」 英語を用いて「聞くこと」「読むこと」の活動を通して、伝え手の考えや気持ちを受け取り、その主旨を把握・理解することで、自らの考えや行動に重ね合わせることができる力。
「表現する力」 英語を用いて「話すこと [発表・やり取り]」「書くこと」の活動を通して、自分の考えや思いを他者に伝えることで、受け手に心的な変化を促し、考えや行動を生み出させることができる力。
「伝え合う力」 自分の意思決定のために、英語で「聞くこと」「読むこと」を通して理解したことや自身の考え、知識・技能や経験を基に、英語で「話すこと」「書くこと」によって、互いに事実や意見、気持ち等を伝え合ったりすることができる力。

3.1.2 豊かなコミュニケーションを図るために必要な力や態度を育成するために

本校英語科では、これまで「円滑なコミュニケーション能力」を高めるために、『創造的な学び』を実践してきた。実際に英語で情報を伝えたり、互いの考えや気持ちを表現したりする言語活動をタスクとし、毎時に行う small tasks と単元を貫く large task, large task の準備段階として設定される middle task の3種類を開発し、実践を重ねた。それぞれのタスクを解決するために、能動性や独自性を発揮させる指導の工夫や、協働的な言語活動を取り入れてきた。しかし、習得した知識や技能・経験を実際のコミュニケーションの場で発揮する機会が少ない。

そこで、これまで以上に実践的なコミュニケーションを見据えた言語活動を行う必要がある。そのために、本校の姉妹校である国立台北教育大学の実習生や台北市立大直高級中学の生徒たちとの交流の場を、言語活動に効果的に取り入れる。これにより、社会や世界、他者との関わりを意識した実践的なタスクとなり、生徒はコミュニケーションに対して目的を見いだしながら、自分の考えや気持ちを伝えるために積極的に学習に取り組むと考える。

また、プレゼンテーションを実践するタスク設定も効果的であると考え。テーマに沿って情報を整理しながら考え等を形成して再構築したり、受け手に配慮した表現方法を用いたりすることは、「理解する力」や「表現する力」を高めることにつながる。必要に応じて、資料やデータの活用、ジェスチャー等の非言語表現の使用により、伝え手と受け手双方の「伝え合う力」も育まれる。結果として、生徒は豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を身に付けることができると考える。

3.2. 構想図

図1は、本研究の構想を図式化したものである（図1）

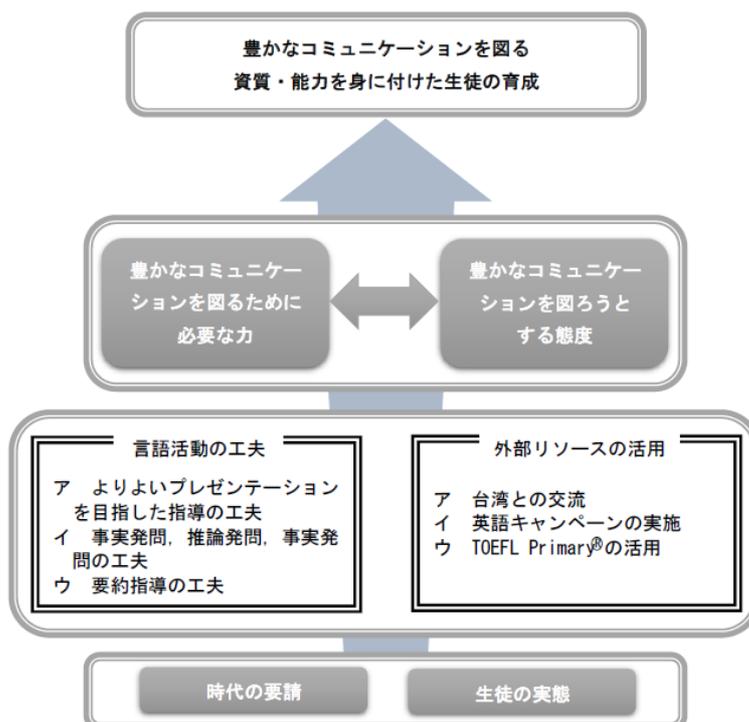


図1 研究の構想図

4. 研究の重点

表2に、研究の重点を示す(表2)。

表2 研究の重点

<p>1 言語活動の工夫</p> <p>(1) よりよいプレゼンテーションを目指した指導の工夫</p> <p>(2) 事実発問, 推論発問, 評価発問の工夫</p> <p>(3) 要約指導の工夫</p> <p>2 外部リソースの活用</p> <p>(1) 台湾との交流</p> <p>(2) 英語キャンペーンの実施</p> <p>(3) TOEFL Primary[®]の活用</p>

5. 研究の内容

5.1. 豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を育むために

5.1.1 よりよいプレゼンテーションを目指した指導の工夫

英語でプレゼンテーションを行うとき、最初に「自分の考えをどのように伝えるか」といった内容を考える。自らがもつ知識や技能・経験を生かし、自分らしさを発揮しながら、与えられたテーマに沿って内容を構築していく。そのとき、「どのような順番で伝えるか」といった構成や「どのような方法で伝えるか」といった表現方法等、目的に応じて多面的・多角的に深く考えるとともに、受け手の捉え方も想像しながら作り上げる必要がある。その過程には、試行錯誤を繰り返したり、説得力を高める資料やデータを探し求めたり、堂々とした姿で発表したりする姿が生まれる。

本校英語科では、受け手に共感を促すために、自分の考えや気持ち、情報等を整理しながら、立ち姿やジェスチャー、資料やデータ、画像といった視覚的情報にも配慮して、受け手に心的変化を促すプレゼンテーションを実践できる生徒の姿を目標とした。このような姿が発揮されたプレゼンテーションを「よりよいプレゼンテーション」と捉え、その実践を目指すことにより、豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を育成することができると考えた。よりよいプレゼンテーションを目指した指導の工夫として、「Story Message の指導の工夫」と「Physical Message と Visual Message の指導の工夫」の二つを実践した。

a Story Message の指導の工夫

Story Message とは、プレゼンテーションのシナリオを表す。受け手に分かりやすく伝えるとともに、共感を促すためには、シナリオの構成と内容についての指導が重要である。

まず、内容や構成にまとまりをもたせるために、シナリオを三部構成で作成する。これまで本校英語科においても、三部構成の基本となる Introduction (序論)- Body (本論)- Conclusion (結論) によるシナリオ作成を指導してきた。なお、David Harrington, Charles LeBeau (1996) は、三部構成の特徴を以下の表3のように分類している(表3)。

表3 シナリオ作成における三部構成の特徴

Introduction (序論)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受け手にとって有益であり、興味・関心を惹きつける内容 ・ あいさつ、概要・有益性・構成についての説明 ・ 対象（受け手）の分析 ・ 未来時制の使用
Body (本論)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 根拠を用いた、内容の詳細な説明 ・ 根拠として、内容を証明・補強するための数値や実例（量・数・価値・よし悪し、比較）、数値の例（値段、割合、統計、サイズ、距離、時間軸等、実測しやすいもの）、実例の例（質感、快適さ、美しさ等、実測しにくいもの）の活用 ・ 内容のつながり（過去形と未来形、陳述と反語）の使用 ・ 接続表現の使用
Conclusion (結論)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受け手への最後のメッセージを伝える内容 ・ 内容の概要やキーとなる数値や実例を繰り返すことでの強調 ・ まとめとしての過去形の使用

また、「自分の経験や好みを含む導入」である self, 「伝えたい内容、共有したい情報を含む本論」である us, 「本論を受けて、これからの行動の変化を促す結末」としての now を取り入れる self-us-now の指導も行ってきた。これに、新たに S P S E の視点を取り入れ、シナリオを作成する。S P S E とは、Situation（現状の把握）、Problem（問題の提起）、Solution（解決策の提案）、Evaluation（評価・まとめ）の頭文字をとったもので、S P S E と self-us-now を組み合わせたものを図2に示す（図2）。

b Physical Message と Visual Message の指導の工夫

Physical Message とは、プレゼンテーションにおける体を用いた表現を表す。小学校では音声を中心とした指導の中で、動作を交えながら伝え合うために、アイコンタクト（目線）やジェスチャー（身振り、手振り）等の手法を効果的に用いている。英語の語彙や表現の知識が十分に習得なされていない小学生に対して、ジェスチャーは英語の理解を補強する重要な要素である。ジェスチャーを多用する小学校での学びを継承しながら、中学校の授業では、アイコンタクトやジェスチャーに加え、ポスチャー（姿勢、ポーズ）等の新たな指導を取り入れることが、生徒のプレゼンテーション能力を育成に効果的であると考えられる。表4はその例である（表4）。効果的なポスチャーやアイコンタクトは、受け手に「落ち着き」「自信」「入念な準備ができている状態」といった肯定的な印象を与えることができる。さらに、ジェスチャーは受け手の理解を助けたり、興味・関心を高めさせたりすることができる。

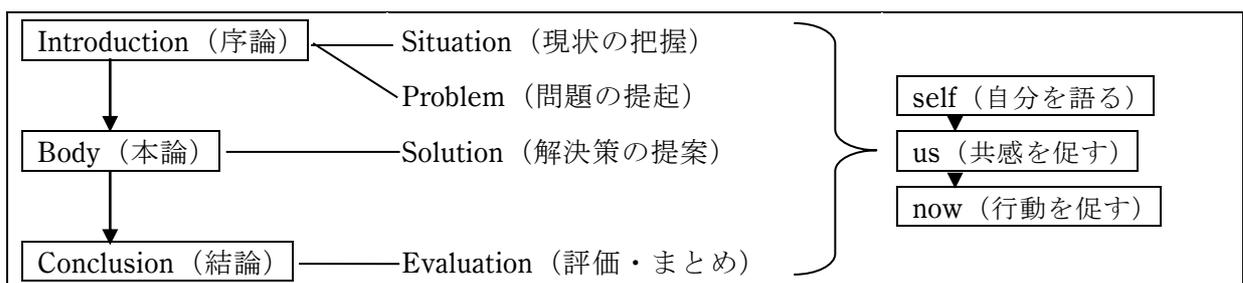


図2 S P S Eによるシナリオ構成

表4 英語でのプレゼンテーションにおけるジェスチャーの例

動作	意味	動作	意味
	one, first two, second three, third		the first step the second step the third step
	equal even same		down decrease decline

また、プレゼンテーションの内容を受け手に分かりやすく伝える方法として、視覚的に情報を示すことも効果的である。その視覚的に情報を伝える媒体が Visual Message である。さまざまな情報端末機器や教具（パソコン、タブレット、黒板、ホワイトボード、プロジェクター、スクリーン、ビデオ等）を用いるとともに、用途に合わせて図表や絵を示すことで、受け手の理解を得ることができる。英語科では、英語によるプレゼンテーションにおいて、教科横断の視点を持ち、他教科の学びを生かすことを工夫とした。

5.1.2 事実発問，推論発問，評価発問の工夫

本校英語科では、生徒が豊かなコミュニケーションを図るための資質・能力を高めるために、授業内で行う教科書の本文に基づく生徒への発問について、「事実発問」、「推論発問」、「評価発問」の三つのタイプに分類した。これらの発問に応答するためには、英語で書かれた文章や情報、文化的背景等を正しく理解する力や、根拠に基づき回答を導き出す論理的思考力、そして問われた内容に対して考えを整理し相手に伝えることができる対話力等が求められる。これは、外国語でコミュニケーションを図るための資質・能力として整理される三つの力とも共通すると考える。三つの発問のタイプを表5に示す（表5）。

Sperber (2008) によると、人は自分にとって関連性があると思われる情報に注意を払う。特に、他者や事象から得た情報が新しいものであれば、より強く関連性を求めようとする。しかし、それらの新しい情報だけに注意を払ってはいは、自分にとって関連性がないと思われる多様な情報を軽視してしまい、より幅広い知識・技能や経験を組み合わせることにつながらない。そこで、自分にとって関連性がないと思われる情報であっても、自身の考えや意見と何かしらの関連性があるかもしれないと積極的に「推測」させ、多様な考えを基にした言語活動が展開される必要があると考える。

表5 発問の三つのタイプ

発問のタイプ	特徴
(1) 事実発問 (fact-finding questions)	テキスト上に直接示された内容を読み取らせる。
(2) 推論発問 (inferential questions)	テキスト上の情報を基に、テキスト上には直接示されていない内容を推測させる。
(3) 評価発問 (evaluative questions)	テキストに書かれた内容に対する読み手の考えや態度を答えさせる。

表6 二つの推論

タイプ	特徴
橋渡し推論 (bridging inference)	文と文の間の意味的な結束性を保つための推論
精緻化推論 (elaborative inference)	文章をより詳しく理解するために、文章に明示されていない情報を補う推論

本研究においては、教師が生徒に投げかける発問が生徒の推測を促し、相手の考えや意図を深く理解し、自分なりにまとめさせることにつながると考え、「推論発問」を授業の中に積極的に取り入れようと考えた。推論 (inference) とは、テキストに書かれている情報を基に、書かれていない情報を読み取る作業である。Singer (1994) によると、この推論には、大きく分けて、「橋渡し推論」と「精緻化推論」の二つがあるとされている (表6)。

橋渡し推論を発問とする場合、テキスト上の情報のみで正解が導ける。一方、精緻化推論を発問とする場合、文中に示されるキーワードを基に、その文から状況やイメージを読み手は連想する必要がある。つまり、精緻化推論を発問の対象にすると、読み手はテキスト情報を基に、背景知識を活性化させながら、テキストを読むことになる。これらのことは、本研究のねらいである「相手の考えや意図を深く理解させる」ことに深く関連すると考えられる。

評価発問についても、生徒の「理解する力」を育むことに有効であると考えられる。なぜならば、生徒は読んだり聞いたりして理解したことを自分の知識・技能や経験と比較したり組み合わせたりしながら、自身の考えや態度を決定することができるからである。これらの考えをもとに、本校英語科が授業で用いた発問の実践例が図3である (図3)。

【教科書の本文】		【学習課程】
<p>□ 桃子が日本の火山について発表します。</p> <p>Mt. Fuji is the highest mountain in Japan. It's a volcano, but it hasn't erupted since 1707. It's been "asleep" for over 300 years.</p> <p>There are more than 100 volcanoes in Japan. That's a large number for one country. Volcanoes like Mt. Asama often erupt. How many volcanoes have you seen? I've visited Mt. Asama twice, but I've never been to Sakurajima.</p>		<p>① 生徒は本文の内容をCDによる音声のみで聞き取り、ノートにメモをとる。</p> <p>② 聞き取ったメモをもとに本文の内容を再構成し、ペアでその内容を伝え合う。</p> <p>③ お互いに内容を確認したところで、教師による発問に解答する。</p>
発問例	予想される生徒の回答	
事実発問 (fact-finding questions)		
<ul style="list-style-type: none"> How many volcanoes are there in Japan? Has Momoko visited Mt. Asama? Has she ever been to Sakurajima before? 	<ul style="list-style-type: none"> There are more than 100 volcanoes. Yes, she has. No, she hasn't. 	
推論発問 (inferential questions)		
<ul style="list-style-type: none"> Where does Momoko live? 	<ul style="list-style-type: none"> She lives in Kyushu area. 	
評価発問 (evaluative questions)		
<ul style="list-style-type: none"> What are the gifts from Sakurajima? 	<ul style="list-style-type: none"> Hot springs. / Sakurajima-Daikon. ... 	

図3 授業における発問例

5.1.3 要約指導の工夫

文章を読んだり、スピーチやプレゼンテーションを見聞きしたり、他者と対話をしたりするとき「相手が最も伝えたいことは何か」という視点で情報を受け取ろうとすることは、コミュニケーションを図る上で必要な力である「理解する力」につながると考える。また、スピーチやプレゼンテーションにおいて内容の概要やまとめを伝えて締めくくるとき、必要な情報を逃すことなく端的に伝えることができれば、受け手にメッセージを印象づけることができ、生徒の「表現する力」の育成にも有効である。そこで、本校英語科では、要約の視点を身に付けるための指導を行った。英語による表現の置き換えの手法であるサマリーに関して、門田、野呂、氏木（2010）はいくつかの概念を挙げて分類している。表7にその分類を示す（表7）。教科書本文を用いたサマリーにより、生徒は必要な語や情報を吟味、精選したり、前後の文の関係性を整理したり、文全体の構成に着目したりする。本活動を繰り返して行うことは、プレゼンテーションのシナリオの結論部分作成の際の指導に生かすことも可能であると考えられる。

5.2 外部リソースの活用

豊かなコミュニケーションを図る資質・能力を育むために、授業における言語活動の工夫に加え、生徒にとって実践的なコミュニケーションの機会、身に付けた知識や技能・経験を発揮する場として、外部リソースを活用することが重要であると考えた。これにより、生徒は学びの目的を明確にするとともに、学びに向かう力を高めることができると考え、本校英語科では、効果的に外部リソースの活用するために以下のような取組を行った。

5.2.1 台湾との交流

本校では、9月第1週から2週間の日程で、国立台北教育大学から小学校教諭を志す教育実習生10人程度の受入を行っている。実習生による授業は、文法指導を含め、オールイングリッシュで展開される。本校の英語科職員が日頃行う授業の流れを実習生に事前に指導しておくことで、生徒は不安なく授業に参加することができる。また、実習生による発問や指示を集中して聞き取ろうとしたり、推測しながら理解しようとしたりする場面が増え、実践的コミュニケーションに必要な力を身に付けながら学習していく。また、GT（英語集会）での異文化理解を目的とした英語での質疑応答、インタビュー、総合的な学習の時間において国際理解教育の一環とした台湾の文化紹介等も行った。すべての活動において、教師と実習生が入念な打合せを行い、目指す生徒の姿を共通理解しておくことが重要である。

表7 サマリーの方法とその例

Paraphrasing	同意語への変換、品詞の変換、統語的変換
Simplifying	簡略化：語の削除により key word だけをまとめる。
Decomposing	複雑な文を二つの文に分割する。
Elaborating	精緻化：含蓄された意味等、補足的なアイデアを足す。
Generalizing	一般化：一般的な広義の考えに変える。
Compounding	複合化：二文を一文にまとめる。

さらに、国際交流やプレゼンテーションの発表の場として、台北市立大直高級中学との交流学習を行っている。例年、スカイプやスマートフォンの無料通話アプリを媒体としたプレゼンテーションや手紙のやりとりを行っている。それに加え、2018年度は本校の代表生徒2名を連れて、台湾研修視察を実施した。代表生徒は学校を訪問し、施設を見て回ったり、英語による学校紹介や英語落語を披露したりする活動を行った。

5.2.2 英語キャンペーンの実施

高円宮杯全日本中学生英語弁論大会を開催する日本学生協会（JNSA）基金の協力のもと、2018年8月1日から3日間にかけて、英語キャンペーンを実施した。これは、「中学生に英語を使う楽しさを知ってもらう」ことを目的としたものである。東京から31名の大学生が本校を訪れ、生徒を対象に「Speaking, Listening」、「Reading」、「Writing」の三つの分科会で英語を用いた表現活動が実施された。本活動は、日頃の学習の成果を発揮する実践の場となった。

5.2.3 TOEFL Primary[®]の活用

また、本校では生徒の英語力を把握するため、Global Communication and Testingが行っているTOEFL Primary[®]を年2回教育課程に位置づけて実施している。生徒の英語運用能力を世界基準で測定することで、生徒の学習意欲向上に加え、教師の指導法改善にも活用していく。

6. 研究の成果と課題

- プレゼンテーションの指導において、Physical Message や Visual Message を取り扱うことで、生徒が自信をもって発表したり、説得力のある内容に仕上げたりする際に有効であった。
- 「推論発問」を取り入れることで、文章を深く読み解こうとする生徒の変容が見られた。
- 要約指導は、生徒の「読む力」の育成に向け、発問の指導と関連付けて更に研究していきたい。
- 推論発問や要約指導に対して、困難を感じる生徒が見られた。生徒にとって難易度の高い内容の際には、協働的な言語活動と組み合わせる行うことが効果的だと考える。
- プレゼンテーションの指導においては、時間の確保が課題である。

【参考文献】

- ・ David Harrington / Charles LeBeau (1996) : 『Speaking of – Basic Presentation Skills for Beginners』マクミラン ランゲージハウス
- ・ 門田修平, 野田忠司, 氏木道人 (2010) : 『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店
- ・ 藤原久雄 (2013) : 『「人間形成のための学力」を育む授業—子どもが自ら学び続けるために—』明治図書
- ・ 八幡紕芦史 (2016) : 『パーフェクトプレゼンテーション』アクセス・ビジネス・コンサルティング
- ・ 文部科学省 (2017) : 『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』開隆堂
- ・ 新里眞男, 佐藤 寧, 高梨芳郎, 卯城祐司 ほか 31 名 (2016) : 『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1,2,3』開隆堂
- ・ 文部科学省 (2018) : 『中学校学習指導要領 総則編』東山書房
- ・ 文部科学省 (2018) : 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂